國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 上山和雄・内山京子・中澤恵子編 『久邇宮
家関係書簡集：近代皇族と家令の世界』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田部, 雄次, Otabe, Yuji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001479

〔書評〕

上山和雄・内山京子・中澤恵子編

『久邇宮家関係書簡集―近代皇族と家令の世界―』

小田部雄次

本書は、久邇宮家二代目の邦彦王の教育係として仕え、久邇宮家の家令・御用掛として久邇宮家の重要な家政に関わった角田敬三郎宛の書簡と、その書簡の分析に基づいた邦彦王を主な対象とする近代皇族をめぐる諸論考からなる。

本書は大きく、資料編、論考編、付録の三部で構成される。資料編では、角田敬三郎宛、角田敬三郎宛以外、その他の書簡の翻刻で構成され、差出人ごとに年代順に収録されている。差出人でもっとも多いのは邦彦王の書簡であり、計37通が確認されている。そのほか一木喜徳郎、植松雅道ら著名な宮内官僚はじめ、久邇宮家に関係した多くの民間人の名もあり、なかには久邇宮家の私的顧問として仕え杉浦重剛とも親交があったという洋画家の牧野克次という従来あまり知られなかった人物の

存在とその果たした役割の大きさもわかり興味深い。これらの書簡の一覧と、主な差出人の簡単な経歴も巻末の付録にあり理解に役立つ。

続く論考編の著者とタイトルは以下の通りである。第一章 上山和雄「史料の概要と邦彦王 邦彦王の個性と皇太子妃問題」／第二章 伊藤陽平「皇室典範成立期の皇族と宮内省 久邇宮家における皇族監督の定着過程」／第三章 内山京子「明治・大正期の久邇宮家の家政構造 宮中某重大事件の一側面」／第四章 内山京子「大正期の宮内省と久邇宮家」／第五章 高橋亮一「久邇宮家における宮務監督の就任事情 本郷房太郎を事例として」／第六章 八巻綾子「久邇宮家ゆかりの土地と建物」／第七章 中澤恵子「角田敬三郎宛書簡にみる邦彦王の日本観」／第八章 真辺美佐「明治期における皇族の外国訪問の歴史的意思 久邇宮邦彦王を中心に」。

そして付録には、國學院大學図書館所蔵「角田敬三郎関係文書」目録、「角田敬三郎関係文書」封筒のみリスト、久邇宮邦彦王・角田敬三郎関係年表、関係人物履歴、久邇宮家系図がコンパクトに整理されており、先の資料編と論考編の理解に大いに有益である。

さて、周知のように、久邇宮家は昭和天皇の皇后となった香

淳皇后の実家であり、その婚姻の過程において、香淳皇后の色覚問題をめぐる「宮中某重大事件」が起きたことでも知られる。すなわち大正9年（1920）当時、皇太子であった裕仁親王

（のち昭和天皇）の妃として内定していた久邇宮邦彦王の長女である良子女王（のち香淳皇后）の母方に色覚異常の遺伝があるととして婚約辞退を元老の山県有朋らが迫った事件である。これに対して、良子女王の父である邦彦王や、皇太子や良子女王の倫理学を担当していた杉浦重剛らが反対の声をあげて抵抗した。山県が長州閥であり、良子女王の母方が薩摩島津家であったこともあり、薩長の藩閥対立の様相もみせ、宮家のみならず、宮内官僚、政界、右翼などを交えた大騒動となった。こうした事件の背景にある久邇宮家の歴史的位置や、そのおかれた政治的立場などを構造的に解明しようとしたのが本書の各論考の狙いといえる。

本書の中核ともいえる第一章の上山和雄論文は、史料概要のほか、「邦彦王の皇族認識と公的活動」と「良子女王と宮中某重大事件」からなる。なかでも「邦彦王の皇族認識と公的活動」では「邦彦王への評価」として、当時の政界や宮内省筋では、「同宮は一と癖ある方」、「ああ云ふ風にては他日皇太子様が御困りなさる」というような邦彦王の姿勢への懸念を示す傾向が

あったことが確認される。久邇宮が外戚として宮中に大きな力をふるい、薩摩の勢力を背景に政治にも容喙しそうなことが注視されていたのだ。

また「良子女王と宮中某重大事件」では、色覚問題の発生とその再調査があり、それでも辞退を非とする強硬派の動きが活発化し、最後には、婚約解消派糾弾の集会があり、さらには大陸浪人の来原慶介が久邇宮属官の武田健三から1万5千円で怪文書流布を請け負う事態ともなったとある。そして武田から支払いがないという来原の脅迫があり、宮家関係者の牧野克次が5千円用意して決着させるといふ「きな臭い」動きが続いたことが述べられる。

こうした上山論文を補完する形で、第二章以下の論考が続く。第二章の伊藤陽平「久邇宮家にみる皇族監督の定着過程」は、皇族附職員改革を通じた皇族の監督強化、皇族の歳費抑制のみならず別当・家令のありかたを解明しつつ、皇室典範成立前後から典範増補までの久邇宮家の動向を分析し、宮家のなかでもとくに皇族監督に反抗的だった久邇宮家の姿を具体的に描く。

第三章の内山京子「明治・大正期の久邇宮家の家政構造」宮中某重大事件の「側面」は、宮中某重大事件による天皇の皇族監督権の動揺、宮内省や元老と宮家との軋轢、皇室の威信低下

などを描き、事件後に久邇宮家附職員をめぐる人事や皇族附職員制度改革が重視される経緯が分析される。

第四章の内山京子「大正期の宮内省と久邇宮家」は、宮中某重大事件後に良子女王の色覚より邦彦王の「御態度」へ宮内省側の懸念の方向が変わったこと、邦彦王が皇族として何を望み宮内省のどのような側面に反発していたのか、宮内省と久邇宮家との関係性がどう変化したのかの問題意識から、波多野敬直、中村雄次郎、牧野伸顕らが宮内大臣であった時期の宮内省と久邇宮家の関係性を描き、牧野の皇族附職員制度が骨抜きにされた背景をさぐる。

第五章の高橋亮一「久邇宮家における宮務監督の就任事情 本郷房太郎を事例として」は、皇族附職員の研究は少ないなかで、職業軍人であり、邦彦につかえた最後の宮務監督であった本郷房太郎を中心に宮家におけるその就任過程やその人柄などを追った。

第六章の八巻綾子「久邇宮家ゆかりの土地と建物」は京都と東京の久邇宮家の邸宅の変遷を丁寧に追った。久邇宮家は兄弟姉妹が多いのでその住居も多彩だったことがうかがえる。久邇宮家の場合、邸宅地の一部が家令名義であり、そのことから皇族個人が自由に処分できる土地の量を一定規模に抑えたい宮内

省の思惑と、一定規模以上の土地を得るために家令など関係者の名義を使い分ける宮家側のかげひきがあったという指摘はリアルだ。

第七章の中澤恵子「角田敬三郎宛書簡にみる邦彦王の日本観」は、邦彦王の日露戦争に従軍した際の長文の書簡や欧州差遣の途中でベルリンから送った書簡などから、「日本を遠く離れて遠方より観察」した邦彦王の日本観をまとめる。邦彦王は、明治35年4月27日書簡ではじめて大陸政策について触れたという。陸軍大学校3年在学中であり、三国干渉返還後の満洲の現況は「独露国の手にあるが如し」、「支那のために大なる害」とみなし、「朝鮮、支那、呂宋の如きは今後日本の大に着目し、且つ着手すべき事業多からん」、「此多望の時及び其の時代に於て生れたるに当り、何も為さずして止は不可ならん」と記した。帝国主義列強の大陸での動きを見聞することで、主体的活動の必要性を強く感じた皇族軍人として目覚めた姿が伝わる。また、日露戦争従軍中に練った大陸政策構想として、「満洲の地味は良好で、北部は麦、南部は陸稲生産に適している」、「吉林省、遼寧省は日本と同様に肥沃な地で、農業に適している」、「日本人による実地調査を積極的に進め、農業の振興に努めるべき」などの提言をしていた点も興味深い。

第八章の真辺美佐「明治期における皇族の外国訪問の歴史的意義 久邇宮邦彦王を中心に」は、明治期の外国訪問の特徴、邦彦王の外国訪問の特徴などを論じた。明治期は皇室が国際化の先導役を果たし、天皇に代わり皇族が率先して国際事情を学び外国を訪問したことを指摘する。なかでも邦彦王は、フランス語が皇室の主たる外国語となっていた時代、ドイツに関心を持ち主体的にドイツ語を学んだ点に特徴があったという。

邦彦王は昭和4年（1929）に亡くなり、その後の世界大戦と関わることはなかったが、皇族が軍人として世界情勢をどのように血肉化していったのかを知る一事例ともいえる。その意味では皇族と軍隊との関係を論ずる章がもう一つあってもよかったと思う。

とはいえ、本書の諸論考を貫く宮家の家政や当事者の意識にまで踏み込んだ実証的な分析は、今後の皇族研究のひとつの方向性を示す労作といえよう。

（A5判、四三〇頁、吉川弘文館、二〇二四年二月発行、定価
一二〇〇〇円＋税）